

タイトル	献辞
著者	小松, かおり; KOMATSU, Kaori
引用	北海学園大学学園論集, 189・190: -
発行日	2023-03-27

ご退職記念号に寄せて

人文学部長 小 松 かおり

本学人文学部日本文化学科の寺田吉孝先生は、2023年3月31日をもって長く教鞭を執られてきた北海学園大学を定年退職されます。学園論集第189・190号合併号が退職記念号として発行されるにあたり、寺田先生の本学への多大なご貢献に感謝の意を表し、送別の辞を述べさせていただきます。

寺田先生は、1980年3月に大阪外国語大学大学院外国語学研究科ロシア語学専攻修士課程を修了され、大阪繊維学園向陽台高等学校、津田学園津田中高等学校で教鞭を執られたのち、1992年4月に本学教養学部の講師として着任されました。1996年に助教授となられ、1998年からは大学の改組によって共通教育・研究センター教育研究部に所属されたのち、2001年から経済学部教授、2004年から経営学部教授を経て、2008年からは、わが人文学部の教授として、また、2017年からは文学研究科においても、教鞭を執られました。

寺田先生のご研究は、1982年に発表された「18世紀末から19世紀初に至る期間のロシア標準語における語彙構成の変化」以降、ロシア語とロシア語教育、ロシア文化に関する幅広い分野を網羅されています。また、1997年から2019年までかけて19世紀のロシア人軍医ドプロトヴォールスキイによって収集された樺太アイヌの語彙や文化が記された『アイヌ語・ロシア語辞典』を共訳され、その成果が2022年11月に千ページを超える『ドプロトヴォールスキイのアイヌ語・ロシア語辞典』として共同文化社から出版されたところです。この辞典は、19世紀半ばの樺太アイヌのことばと文化を知る貴重な文献であり、今後のアイヌ文化研究に大きく貢献することが期待されます。また、ウクライナ語についても論文を執筆されるなど、東スラブ語圏について、幅広い分野の研究を発表されました。

教育分野では、北海学園大学で唯一の専任ロシア語教員として着任されて以降、一般教育科目のロシア語とロシア文化の多くの科目を担当され、教科書も複数執筆されました。また、ロシア語母語話者である非常勤の先生方と協力して一般教育のロシア語全体をコーディネートされてきました。人文学部に所属なさってからは、それらの科目に加えて、学部の基礎教育と大学院の比較言語研究特殊講義を担当され、人文学・教養教育に大きく貢献されました。

大学運営では、人文学部教員として教務委員、入試委員などの多忙な業務を分担される一方、

一貫してロシアとの交流事業の責任者としての役割を果たしてこられました。本学に着任して間もない1994年よりヴラヂーミル大学での語学研修（4～5週間）を企画され、自ら学生を引率して計14回、延べ134名にのぼる学生を引率されました。2014年度にウラヂーミル大学が本校の協定校になるまでは、ずっと先生の手弁当での企画でした。学生がクラス分けによって他の学生よりも高い受講料を求められた場合には、そっとその分を補填されたこともあるそうです。参加学生からは、ロシアに関係する仕事に就く者も多数輩出しています。加えて、交流協定のあるシベリア交通大学、サハリン大学、ノボシビルスク総合大学、ヴラヂーミル大学の4校から、例年合計9名程度の学生を約90日間受け入れるにあたり、2011年より世話役として中心的な役割を担われ、双方向の交流を支えてこられました。

学外では、日本ロシア文学会では理事（2015～19年）および北海道支部長（2017～19年）に加え、現在も札幌青少年国際交流協会では幹事を務めておられます。さらには、ウクライナ赤十字社ハルキウ州支部機関誌『Червоном по білому』編集委員を務めておられます。

寺田先生のロシア語の授業のいくつかは土曜日に開講されています。特に一部の学生には土曜日の授業は不評なのではないかと勝手に思い、なぜ土曜日なのかとお訊きしたことがあります。実は、もともと、土曜日の開講ではなかったのだそうです。現在、本学の一般教育科目では、ロシア語をはじめ、英語以外の外国語の授業は、段階的に多く科目が開講されています。一見、勉強したい学生には環境が整っているようにも見えるのですが、実は、学部専門科目と重なる時間も多く、せっかくロシア語を学び始めた学生が、途中で受講できない期間ができてしまうことがあり、それでもロシア語を学び続けたいと考える学生のために、専門科目の少ない土曜日に続きの時限で開講することで、学習が継続できるように配慮したのだと教えていただきました。

そもそも、土曜日の授業は、すでに基礎は勉強してしまった4年生や社会人の非公式な自主ゼミとして始まったともうかがいました。この自主ゼミは、先生が赴任されてから新型コロナウイルスが流行するまでずっと続いていたのだそうです。ロシアへの学生の引率も含め、赴任後数十年にわたって、土曜日と毎年の長期休暇の数週間を学生のために費やしてこられた先生の熱意に感銘を受けました。学生のことも、教えることも、心から大切にしていっしょなのだと思えます。

昨年以來のロシアのウクライナ侵攻は、ロシアとウクライナ両方にご縁があり、知人も多い寺田先生にとって、とても辛いできごとであったと拝察します。ふだんは温厚でユーモア溢れる先生が、ときにはロシアという国家に対する怒りを、ときには両国の歴史に対する日本人の無理解に対する苛立ちを表現されるのを拝見しました。

実は、この原稿提出後に、「人文学会」という人文学部教員有志の研究会で、寺田先生が「言語と文化からウクライナを理解する」という研究会を企画してくださっています。この研究会でウクライナの言語・文化・歴史について、寺田先生の深い知識とロシア・ウクライナ両方に対する

深い思いを共有していただけることに感謝したいと思います。

ロシア・ウクライナを含む旧ソビエト連邦諸国と東スラブ言語への寺田先生の深い知識と熱い思いは、これからも、広く共有されるべきです。今後もぜひ、わたしたちにご指導ご鞭撻いただくとともに、広く社会でご活躍されますことを祈念いたします。

寺田吉孝先生には、本学における多大な貢献に鑑みて、2023年4月1日付けで、北海学園大学の名誉教授の称号が授与されます。

